

伝統を継承し次代に伝えて来た暖簾が有ります。

その代表的な暖簾が『砂場』『更科』『藪』です。今回は砂場の暖簾のお話です。

・天正12年(1574)大阪で創業

砂場という店名はもともと俗称で、大阪城築城のさいに築城資材の砂や砂利の置き場になった新町砂場という地名に由来する。

当時この地位に「和泉屋」と「津国屋」の二軒の麺類屋が有りそれ相当に繁盛していた。最初は「砂場の和泉屋」「砂場の津国屋」と呼ばれていたのが何時の間にか単に「砂場」と呼ぶようになった。俗称が独り歩きするうちに蕎麦屋も方も自ら「砂場」と名乗る様になった。

津国屋



和泉屋



江戸の蕎麦やとして「砂場」が初めて登場するのは、寛延4年(1751)の蕎麦全書で当時の江戸市中のそば屋の名目のひとつとして「薬研堀大和屋大阪砂場そば」を挙げている。

『けんどんそば切り』とは <1664年頃>

蒸籠を使った蒸しそばで販売していた。吉原の値段の安い遊女・喧鈍女郎をまねてつけられた名という説が、江戸中期に書かれた吉原の沿線史にある。「けんどん」には様々な字が当てられてきたが現在は「慳貪」が定着している。吉原ではさ最初一杯30文の高値で売り出したが寛文八年には8文に下がっている。



雑学

※ つなぎに小麦粉を使う様になったのは元禄末(1703)から享保年間(1735)
(江戸時代初期の蕎麦はそば粉100%)

※ 大阪・新町遊郭は、江戸・吉原、京都・島原と並び称される一大遊里となった。

次号は麻布永坂「更科」